

メイニア

(上)

磐田 匠

謝辞

謝辞

この作品を書くにあたって。

『その世界』の知識が全くなかった僕に、辛抱強く、暖かく、ときにはキレながら色々なことを説明してくれた...

きんちゃん、かずくん、けんちゃん、よしくん、つよしくん、たいくん。

ありがとうね。みんなの協力がなかったら、この作品はなかったと思います。

でも、ごめんね。

冷たいようだけど、僕には、君たちの『世界』はやっぱり理解できないです。

あと、全く逆の世界...『狩り』のことをいろいろ説明してくれた、

Hくん、Kくん、Rくん。それから名前を覚えてくれなかったみんな。

ありがとうね。

でも、君たちのやってることは、間違っているんだよ。

君たちが自分でそれに気づいてから、この作品を手にとって欲しいと思っています。

プロローグ

プロローグ

1

『今度の金曜、ホモ狩りするんだけど、お前行く？』

『ホモ狩り？何それ？』

『あ、そっかあ。まだ誘ったことなかったよなあ。俺たち、ときどきやってるんだけど』

『それってオヤジ狩りとか浮浪者狩りとか、そういうの？』

『まあそんな感じかな』

『やばくない？それって』

『え？ やばくないよ。何心配してんの？』

『捕まったりしないの？ポリとかに』

『大丈夫だよ。「狩り」ってさ、ホモが集まる公園とかでやってるんだけど、そういうところってポリとかあまり近づかないんだ。カズヤさんが言ってた。そりゃそうだろう。職務質問しようとしてホモ同士が裸で抱き合ってるのを見つけるなんて、ポリさんもイヤだろうしさ。そういうところって、近くの奴らが通報とかしない限り来ないんだって』

『そういう奴らってさ、反撃とかしてこないの？』

『こっちはみんな武器とか持ってるからさ、よっぽどの奴じゃないと反撃なんかしないぜ。抵抗なんかほとんどしないで逃げるだけだよ。それにさ、裏技もあるんだよ。最初にケータイのカメラで公園にいるそれっぽい奴の写真撮っておくんだ。で、そいつがホモだってわかったらあとはこっちのもんだぜ。そいつの免許書とか名刺とかゲットしたらもう完璧。そいつきつと、どれだけボコボコにされてもどこにも行けないぜ。浮浪者の奴なんかだと平気で警察呼んだりするけど、ホモは大丈夫。持っていきかた次第じゃいい金づるになるかもよ』

『それって、オイシイじゃん』

『たいていカズヤさんやヨシキが獲物みつけてくるんだけどさ。最初のころはさ、連中があつまる公園とかトイレとかに網はって、襲撃とかして遊ぶだけだったんだけどさ、それだけじゃ面白くないからさ、最近いろいろ工夫してんだよ...』

『どんなふう？』

『待ってるだけだったら、ホモが来ないときだってあるじゃん、バカみたいに三時間も四時間も獲物を待ってられないだろ。でさ、カズヤさんがホモ専用の出会い系にカキコしてさ、ひっかかってきた奴を待ち合わせ場所で襲うんだよ。こっちのほうが効率いいぜ。オヤジのホモだったら結構金持ってること多いし。エンコーなんかほのめかしてたら、あいつらバカだから封筒にちゃんと金とか用意してやがんの』

『あはは...』

『で、今度の金曜なんだけど、ヨシキがひっかけたオヤジを呼び出すんだよ。俺的には人数増やしたいんだけどさあ。でも金曜じゃん。みんなけっこう飲み会とかデートとかで忙しいんだよ。』

で、お前誘ったことあったかなあって思って連絡したんだけど』

『何人集まってんの？』

『えっと、カズヤさんとヨシキと俺は決まり。あとマサとユカちゃん。その二人が来ればトモヨちゃんも来るらしいよ』

『マサ、女連れかよ』

『それがさ、あいつらうまくいってないんだよ。てか、お前もアイコちゃん連れてきたらいいじゃんか』

『俺たちまだそんなじゃねえよ』

『いいじゃん。これを機会にやっちゃえば』

『あはは...それもいいかもね。その公園ってそういうことできる場所あんの？』

『そこらじゅうにスポットありだぜ。でも虫よけスプレー持っていったほうがいいかも。この前、マサが蚊に刺されまくったって言ってたから』

『外でやるときは必需品なのに。バカだね、あいつも』

『実はさ、俺もそろそろドーテー捨てたいからさ。秘かに期待してた、ユカちゃんと仲良くなれたらなあって』

『お前ユカ狙いなのか？やめとけよ。仲間のモトカノとやるのなんか、よくないぜ』

『それがさ、最近、俺、いい感じなんだよ。ユカちゃんと。マサもべつにいてもいいって言ってくれてるし』

『ホントかよ？信じられねえな。ってか、今どこにいんの？』

『金曜の下準備。春日競技場の運動公園に来てるんだよ』

『何してんの？』

『へへ。俺、太ってるだろ？走るの遅いし。だからさ、こういう狩りのときは工夫しなくちゃな。公園のあっちこっちの草むらとかに鉄パイプとかいろいろ隠してるんだよ』

『気合はいつてるなあ。てか、お前ビビってんの？』

『ビビってんじゃねえけどさ。反撃されて逃げられたりしたら気分悪いだろ。あっちこっちに武器隠してたら手ぶらで追いかけて、近くの武器とってシメてやれるじゃん』

『はは。なるほどね』

『効率よく狩りするための知恵だよ。これは』

『でも面白そうだな。俺、とりあえず参加ね。何時にどこ？』

『...ちょっと待って...ごめん、携帯バッテリーやばい。メールで連絡入れるわ』

『おう』

『じゃあな』

『金曜な...』

クリック。

『ゲイのためのサイトです。同性愛に理解のない方は入場をご遠慮ください』

『1・男と男の出会い場所』

『2・お勧めサイト・リンク集』

『3・俺の裸を見てくれ／投稿画像集』

『4・男と男の発展場情報』

4、クリック。

『男と男の発展場情報はこちら』

『1・待ち合わせ掲示板』

『2・発展場情報掲示板』

『3・危険場所情報掲示板』

3、クリック。

『発展場・危険情報／ハッテンで危ない目にあっちゃった人、掲示板にカキコしてみんなに教えてあげよう』

『最新の書き込みを見る』

クリック

『一八一・海浜公園で』

『一八〇・中央線、浅木駅のトイレで』

『一八〇・レス記事』

『一七九・学園線、研究都市駅発の始発電車で』

『一七八・春日競技場で』

『一七八・レス記事1』

『一七八・レス記事2』

『一七八・レス記事3』

『一七七・クアハウス朝日で』

一七八、クリック

『一七八・春日競技場で。』

ヒロシ 春日市 二三歳 一七一×六三。

春日競技場の三号トイレがハッテンバになってるって聞いて行ってみたんですが、ひどいめにあいました。中学生か高校生くらいのホモ狩りグループにしゅうげきされました。鉄パイプみたいなので殴られて、財布とかぜんぶ盗られました。その日はたまたまだったけど、免許とか名刺とか財布に入れてたらと思うとぞっとします。みんなあそこは行かないほうがいいよ。』

『一七八のレス記事1』

ヒロ 西春日 三一歳 一六五×五九。

一七八のヒロシさんへ。俺もその話聞きました。そいつらスタンガンとか鉄パイプとか持っておいかけてくるらしいよ。武器もって三号トイレのあたりの様子をうかがっているのをランニングしてる友達が、みかけたそうです。ところで一七八のヒロシさん、近くだよ。メールとかし

ませんか？よかったらアド教えて』

『一七八のレス記事2

のっぺらぼう 春日市 年齢秘密。

ホモ狩りこわがってたら何もできないよ。ウザイ話やめようよ。あそこ、けっこう人くるし、俺はこれからも行くつもり』

『一七八のレス記事3

圭二 住所秘密 十八歳。

それとはちょっと違うけど、もっと怖い噂聞いたよ。エッチしてたらいきなり首しめたり、エッチしながら殴ったり暴力ふるう人が競技場のトイレにときどき来るらしいです。サドっていいのか。それもかなり本気で首しめたり殴ったりするらしい。そいつ、かなり身体も大きくて、プロレスラーみたいな奴なんだって。そいつ、何人か殺してるかも...みんなあそこはあまり行かないほうがいいと思うよ...』

操作中止。

『接続を切断しますか？』

クリック。

金曜日（深夜）・春日競技場運動公園

3

三号トイレ 午後十一時

三号トイレの『個室』のドアが閉まっている。

黒木大介はあえて足音をたてながら小便器に近づいた。

個室を使用しているのはゲイだろうか。ノンケだろうか。

こんな時間にこの個室が普通の『トイレ』として使用されることはほとんどない。

春日競技場公園の三号トイレは、ゲイの『待ち合わせ場所』としてお仲間には有名な場所だ。

ここが『そういう場所』であることはゲイ向けの地域サイトの掲示板で知った。

ゲイたちが『ハッテンバ』と呼ぶ『出会いと性交の場所』は意外に多い。しかし、同性愛に関心のない、『ストレート』が絶対にこの場所を使用しないという保証があるわけではない。

大介は小用をたすふりをしながら個室トイレから聞こえてくる音に耳をすませた。

個室の中の人間がゲイであるかどうかは、音とその雰囲気で見分けることができる。

ストレート。ノンケ。大介たちがそう呼ぶ『非同性愛者』は、排泄のためだけに個室を利用する。それ以外の用途は考えられない。だから。衣擦れの音・汚物の匂い・ペーパーホルダーの金属音。トイレでは当たり前の気配が漂う。

しかし、今日のように何の音も聞こえてこない場合は、中にいる人間は『ゲイ』である可能性が高い。

個室の中から外を覗き見るような視線が感じられる。

吐息を押し殺したような息づかい。

『彼』もまた、探っているのだ。扉の向こうの人間が、ゲイなのかストレートなのか。

大介はズボンのジッパーから性器を出したまま、ゆっくりと個室に向き直った。

扉の向こうから小さなためいきが聞こえた。

そのままゆっくりと近づく。

ドアの細い隙間から、中をのぞく。

三十後半くらいの男が全裸で立っている。

あまりにも狭い隙間からは、相手の顔までは確認できない。

大介はゆっくりと、間隔をあけて三回ノックした。

スライド式の鍵が外される音。細く開かれるドア。

大介はすべりこむように個室の中に入った。

大介がゲイである自分に気づいたのは小学校五年生のときだった。

ある日、授業中だというのに女子児童たちが女性教諭に引率されて講堂へ入っていった。

教室には男子生徒たちと、担任の男性教諭、そしてクラスの半分の空席が残された。

セイキョウイク。

中年の域に入ろうとしている教諭は、同級生たちにやがて訪れるであろう身体の変化についての説明をはじめた。

「もう気づいている子もいるかもしれないけど、男の子は、女の人の裸を見るとおちんちんが大きくなることがあります。これはね、ちっとも不思議ではないし、恥ずかしいことでも何でもない。むしろあたりまえのことなんだよ...」

『え?』

男って、『女の人の裸』を見るとおちんちんが大きくなるものなの?

僕は。

この瞬間、大介の体と心に強烈な違和感が走りぬけた。

『これまでどんなときに自分のおちんちんが大きくなったかくらい覚えている』

『僕のおちんちんは女の人の裸をみても大きくなったことがない』

『僕のおちんちんが大きくなったときは、そうじゃなくて...』

(僕は変なの?)

『これまで僕のおちんちんが大きくなったのは、仲のいい男の友達の裸やおちんちんを見たときだ』

周囲の人間と自分は、どこか違うのかもしれない。

小学生はそのとき、何かを自覚した。

大介は、その日から自分自身の『好きになる』『恋する』『愛する』という感情を他人に悟られないように振る舞うことになった。

悟られてはいけない。

彼の恋愛対象は常に男性だったのだから。

大介の初恋の相手は、スイミングの男子学生コーチ。

まだ小学校高学だった少年は、周囲が不思議がるほど水泳に熱中した。

大介にとってそれは不思議でも何でもなかった。

大好きな人と一緒にいたい。大好きな人が自分に微笑む顔が見たい。それだけだった。

やがて大介は選手コースに推薦された。彼は中学生になっていた。

大介が恋したコーチは、そのころにはもうプールを去っていた。

小学生から中学生へ。たったそれだけの環境の変化が、大介を大きく変えた。『性』にかかわる多種雑多な情報が、無秩序に彼の周囲を飛び交った。

男性しか愛せないということ。

女性を好きになることができないということ。

心と身体の『違和感』が彼を苦しめた。

それだけでなく、小学生のころは楽しくてしかたなかったスイミングの練習がやがて彼にとって苦痛となりはじめた。

恋愛の対象を失った彼は無意識のうちにその心の隙間をうめてくれる『誰か』を探しはじめた

。

手を伸ばせば触れることのできる場所に、同年代の少年たちの裸体がある。

しかし彼はそれに触れてはならなかった。

絶対に。

気づかれてはならないのだから。

何人ものチームメイトの中で、彼はいつも孤独だった。

高校時代のある日、一本のビデオが彼を変えた。

選手コースの映画好きな先輩が貸してくれた古いビデオ。

軟弱そうなイギリス人の若い俳優が出ていた。

『ゲイ』である自分の性癖に悩み、苦しむ青年の物語。

涙が止まらなかった。

映画の登場人物は作りものかもしれないけれど、きっとみんな自分と同じように悩み、苦しんでいる。

その日から大介は悩むことを止めた。

彼の毎日は『友』を探す毎日になった。

毎日、プールで泳いだあと、携帯からあるサイトにアクセスする。

『スクール』という名前がつけられた個人サイト。

そこには大介と同じように、男性しか愛することのできない高校生や大学生が、『友』を求めてアクセスしてくる。

彼らとメールで語り、チャットで意見を交わし、電話で声をきく。

やがて、『トモダチ』と出会うことのできる場所の話になる。

『ハッテンバ』。

そこは心と身体のギャップに悩む者たちの場所。同性愛者たちの聖域。

青年と呼ばれる年齢になった大介は、やがて『春日競技場公園・三号トイレ』に通うようになった。

『今日』は誰かと待ち合わせしていたわけではなかった。

『競技場のトイレ...誰かいるかなあ...』

軽い気持ちで足をむけた。

最近はこの公園に『ホモ狩り』の連中が出没するらしい。

『スクール』にリンクしていたゲイサイトの危険情報にこの場所の投稿があった。

ここってそんなに危ない場所なんだろうか。

危険情報が出回ってからというもの、ここであまりゲイを見かけなくなった。

そうになるとホモ狩りをする危ない連中もここには来なくなる。猟師が狩場を変えていくように、ホモ狩りの奴らも成果が少なくなれば場所を移動するだろう。

それがあまりにも楽観的な予測であることはよくわかっている。

現実にはここはまだまだ危険な場所だ。

しかし感情は止めようがなかった。

大介は狭い個室の中で、その男と向かいあった。

男の年齢は四十くらい。

短く刈り揃えた頭に白いものが半分くらい混じっている。

日焼けした健康そうな肌。

薄く色のついた眼鏡の奥には、うるんだような悪戯っぽい目。

男は大介の目をじっと見据えながら自らの性器を弄んでいる。

『触って』

男の唇がそう動いた。

大介は少しだけためらう素振りをみせてから、男の性器に手を伸ばした。

「くっ」

男の喉の奥から小さな声がもれた。

男の手が大介の股間に伸びる。

ジーンズの上から大介自身がまさぐられる。

ため息にも似た声が漏れた。

次第に荒くなる二人の息が、トイレの壁に当たって消えていく。

男の唇が大介の口を塞いだ。

ほのかな煙草の匂いがした。

突然、激しい物音。

口づけを交わしていた二人はほぼ同時にその音の方向に顔を向けた。

再び、激しい音がして、個室トイレのドアがきしむように揺れた。

*

「うらあ、出てこい、変態」

カズヤが叫びながら個室のドアを蹴りつけた。

「出てこねえんだったらこっちからドア蹴破ってひきずりだすぞ、オラ」

個室の中からは、外で何が起きているのかわからない。変態野郎たちは、息をひそめて嵐が過ぎ去るのを待っているのだろう。

甘い甘い。

嵐は過ぎ去らない。

これは狩りだよ、オジサン。

髪を短く刈り揃えたカズヤはものすごい勢いでドアを蹴り続けている。マサはそのドアが蝶番からはずれそうなくらい軋む様子をじっとみていた。

「中にいる変態く一ん、一分以内に出てきなさい。出てこない場合は、放水攻撃を開始しま

一す。さらにその五分後、機動隊が突入しまーす」

おどけた調子で、タクが言った。タクはグループの武器係だ。金髪デブの彼は、走って逃げる獲物を追うことには不向きだが、道具の調達と絶妙な配置でそれを隠す能力に長けている。狩りには欠かせない中心メンバーだ。

「タク、バケツ持ってきてるよな？」

「必需品じゃん」

「よっしゃ、ドアの上から水ぶっかけてやれ。おら、変態。早く出てこねえとあとが辛えぞ。出てくるなら今のうちだぞ」

個室の中からガサガサという衣擦れの音や、ベルトバックルが何かに当たるときの金属音が聞こえてくる。

このクソ変態野郎が。

慌ててズボンでもはいてるんだろう。

「水とバケツ、お待ちっ」

「おら、第一回目、放水いくぞ」

カズヤは茶髪短髪ピアス。NBAのタンクトップ。目つきは悪く、声も野太い。しかし凶暴そうに見える外見のわりにクレバーな男だ。いや、あえて凶暴そうに振る舞って自分の小賢しさを隠そうとしている。

放水攻撃は彼の発案だ。相手をびしょ濡れにしてしまえばまず抵抗への戦意をそぐことができる。次に獲物の携帯電話が使用不能になる。獲物がポリへ通報することができなくなるわけだ。さらに獲物が逃走に成功した場合も、濡れた足跡を追いかけることができる。必殺武器のスタンガンも威力を増す。いいことづくめだ。

何よりも『水ぶっかける』と言われた相手の精神的威圧感は半端ではないだろう。

かまわないさ。どうせ相手は変態ホモ野郎だ。

「いくぞ、せーのっ」

バケツの水がドアの向こうにぶちまけられた。

「もう一発いくぞ。早くでてこいよ、おたくら」

個室の中にいるのは二人。一人はヨシキが携帯サイトでひっかけた四十代のオヤジ。

もう一人は『飛び入り』の獲物だ。大学生くらいの丸刈りの奴。オヤジが個室に入って十分くらいして、こいつが同じ個室に入っていった。こんな場所こんな時間の公園トイレで、二人の男が同じ個室に入っていったら『あれ』以外にやることはない。

こんなキモチワルイ奴らにジンケンなんかない。

相手の変態のホモだったら何したっていい。

もちろん、俺たちにとって、獲物は必ずしも『ホモの変態君』である必要なんかないんだけど。

オヤジだったらオヤジ狩り、浮浪者だったら浮浪者狩り、ホモだったらホモ狩り。

獲物が変わったら呼び名が変わるだけ。だが、狩りの内容は似たようなものだ。

俺たちがやっていることは裁判じゃないんだ。公正である必要なんかない。獲物をホモだとき

めつけてやることさえできればいいのだ。

カズヤがもう一度個室の中に水をぶちまけた。

女みたいな情けない声が個室のなかから聞こえる。しかも二人分。

「おら、出てこい、ホモ」

長い間。

内から鍵を外す硬い音がする。

それと同時にカズヤがドアを力まかせに蹴飛ばした。

個室の内に向かって開くドアが音をたてて開く。木製のドアは中年男の眼鏡を飛ばし、坊主頭の大学生の肩に当たってはねかえった。

ずぶ濡れの中年男は、反射的に眼鏡を拾おうとしてかがみこんだ。

男の右手が眼鏡にたどりつく前にカズヤの蹴りが男の腹にめりこんだ。

男は蛙のような声をあげてその場にうずくまる。

カズヤが男の襟元あたりをつかんだ。叱られた幼児が親に連れられるように、男はひきずり出された。

個室の中には若い男。若いとはいってもマサたちよりはるかに年上だ。

頭から水滴をしたたらせ、小動物のような怯えた目で周囲を見まわしている。

「お前たち、こんなことをしてただで済むと思ってるのか...」

カズヤの足元で男がうめくように言った。

「うっせえ、黙れ、ホモ」

今度はタクがオッサンの太股あたりを蹴りながら言った。

「あんまりえらそうな口きかないほうがいいんじゃないの？オッサン...」

毒を持った口調で言うカズヤの手には黒い革の定期入れが握られている。

マサはカズヤがオッサンをひきずりだしたとき、彼の右手がスーツの内側に伸びるのを見ていた。

さすがだね。

マサは憧れの眼差しでカズヤの後ろ姿を見ていた。

カズヤがチームのリーダーであることは、彼がただ年長であるからだけではない。

腕っぷしの強さ。頭のよさ。度胸。

不良たちの世界で最も必要な要素を彼は兼ね備えている。

カズヤが定期入れからオッサンの名刺を抜き出した。

「へえーっ、いいところに勤めてんじゃん。高島衣料湾岸支店、課長補佐。三浦雄二。オッサン、あんたの趣味のこと、会社の連中知ってるの？」

この瞬間、オッサンの目が負け犬のそれに変わった。

「なあオッサン、あんたが中学三年のヨシキってオトコノコとエンコーしようとしたこと、会社の奴ら知ってるの？あん？」

オッサンの目に絶望の色が広がる。

「おい、ヨシキ、顔見せてやれよ」

奥の出入り口を固めていたヨシキが顔をだす。

「オジサン、ボクの大事なところなめなめしてえーん。おこづかいくれるんだったら、もっと恥ずかしいことしてもいいよおーん。バーカ。エッチはごめんだけどさ、おこづかいならもらってやるぜ」

童顔でジャニ系の顔をした、本物の中学生ヨシキが言った。

「オジサン、もうわかってると思うけどさ、俺、ホモじゃないんだ。オジサンとのメール、楽しかったよ。ちょっとキモかったけど」

『オッサン』は脅しや理屈で現状を打破することをあきらめ、一転して泣き落としが始まる。

「頼む、会社には、会社にだけは言わないで。こんなことバレたら私はおしまいだ」

オッサンが言い終わるのを待っていたかのように、カズヤが言った。

「場所変えよう。人目につかないところに行こうぜ、オッサン...」

六号トイレ 午後十一時三十分

敬吾はゆっくりと『その扉』をノックした。

敬吾は二十五歳。

茶色に染めたセミロングの髪をふわりとかきあげて、彼は個室の中の反応を探った。

この公園に通うようになってもう五年くらいになるだろうか。

敬吾は精神的にはストレートの男性の部類にはいる。女の裸を見ると勃起するし、女ともセックスできる。

『バイ』。ゲイの人たちは敬吾のような男をこう呼ぶ。『バイセクシュアル』、つまり『男性とも女性とも性交できる男』である。

ゲイたちの世界ではセックスの嗜好を『ウケ』『タチ』といった言葉で表現する。

男女の性交における女役が『ウケ』、男役が『タチ』。

どちらもできる者を『リバ』と呼ぶ。『リバーシブル』、表も裏も使えます、という意味なのだろう。

敬吾はそんな暗号のような言葉はあまり知らない。

彼にとって、ゲイとのコミュニケーションはセックスだけで充分だ。

出会って、疑似恋愛のような語らいがあって、やがてそれが愛になって、セックスがゴール。ゲイにもあるそんな面倒くさいプロセスは必要ない。セックスはスタートであり、同時にゴールだ。

敬吾にとって『ゲイ』は、自分の欲求を満足させる相手としてしか存在しない。自分自身の『男性側』の性欲は女性相手に発散できるが、『女性側』の性欲は同性愛者に処理してもらえない。

敬吾の身体が『そうってしまった』理由は彼が全寮制の高校に通っていた三年間にある。

彼は『生徒のデキの悪さゆえに全寮制をもって私生活も管理する』という建前の私立高校に進学した。自ら希望して進学したわけではない。『そこ』にしか行くことができなかった、というのが本当のところだ。

町のはずれの、岬の近くにその学校はある。そしてその学校に寄り添うように古びた寮が建っている。

学校の近くには何もない。

一面の草地と、申しわけ程度に舗装された細い道路。

必要な物は学校の『購買部』で調達するか、片道一時間近くを歩いて町のコンビニまで買い出しに行くかしかない。

これはつまり、学業の場に必要のないもの、学生にふさわしくないものはそれくらいの苦勞をしないと手に入らないということを意味している。

『物理的に外世界と隔離されなければ学校というものが成立しないような』悪たれどもはめいめに『文化的』生活に必要な物資の調達を始める。

俗悪週刊誌や成人雑誌などはもちろんのこと、酒や煙草でさえ誰かがどこかから調達してくる。

それでもただ一つだけ用意できないもの。それは『女』である。

異性への興味で脳味噌が破裂しそうな年頃の男たち。

彼らの中でも比較的要領の良い者は、町に相手をつくり、夜な夜な寮を抜け出してはエネルギーを発散させている。

問題なのはそういう相手に恵まれなかった男たちである。

この学校に放り込まれる学生たちは、一様に『悪い』。そういう者たちはみな早い時期からそれなりに遊び、それなりに女を経験し、それなりに『そういう快感』を理解している。

しかし陸の孤島に幽閉され、その欲望の矛先を失った若いエネルギーは、どうにかしてその解放先を見つけようとする。

敬吾は入寮の日、『新寮生歓迎会』と名付けられた席上で、寮生全員の前で五人の上級生に輪姦された。後で聞いた話では、その日、同級生の八割近くが犯され、さらにそのうち半数が複数の上級生にマワされたらしい。

相手は年上である。力でも体格でも勝てない。彼らはやがて、加害者からの洗脳をうける。

『前もやり返せばいいんだよ。来年の新生相手にはさ...』

狂気が連鎖し、翌年同じことが繰り返される。

翌年は敬吾たちが新生を犯す。それが寮生にとっての通過儀礼だった。

ただ、敬吾だけは寮内の他の同級生と事情が違っていた。

同級生たちにとって、入れられるのは一度きり。二年目からは入れるだけ。

しかし、敬吾には『それ』は『一度きりの遊び』ではすまなかった。

敬吾は華奢で小柄。顔だちも整っている。このころから髪を伸ばし、脱色していた。

そのためか、入寮してから彼は毎晩のように上級生たちの部屋に呼び出され、上級生たちに弄ばれた。

断ることはできなかった。

自分の居場所を守るため、彼は耐えた。

三年の上級生の部屋から出ると、次は二年の上級生に呼びつけられる。

部屋に戻ると、同級生がベッドに這いこんでくる。

ある者は力づくで、ある者は煙草や酒を敬吾にふるまいながら。

しわくちゃの千円札を握りながら、敬吾に抱きついた先輩もいる。

そんな毎日のなかで、敬吾の『肉体』に変化が現れた。

責められる『苦痛』がすこしずつ快感に変わり始めたのだ。

男性の裸を見て、抱かれないと思ったことはない。

男性器を見て勃起することもない。

それなのに、彼の身体の一部は、挿入され、責められることに喜びを感じている。

彼はむしろ積極的にその快感を認めた。

一年後の新入生歓迎会では、新入生に混じって先輩や同級生たちに尻をつきだし、さらに一年後は嫌がる新入生の腹の上で腰を振り、十数人分の精液をしぼりとった。

高校を卒業してからも、その性癖は止まらなかった。

女性を抱き、女性を犯す一方で、敬吾は男性に抱かれ、男性に犯され続けた。

ノックの返答はない。

敬吾は毎月月末の金曜日、このトイレにやってくる。

先月は空振りだった。

その前の月も誰にも会えなかった。

最後にヤツタのは三カ月も前になる。

そろそろブチこんでもらわないと、気が変になりそうだ。

『個室』からは間違いなく人の気配が漂う。

しかも普通の奴じゃない。

中の奴はぜったいホモだ。

敬吾は確信していた。

もう一度ノックする。

反応がない。

しかたない。ここはあきらめて、三号トイレでものぞいてみよう。

敬吾がトイレ棟から出ようと向き直ったとき、背後で鍵をあける硬い音がした。

アンバランスの配置された照明のせいで、個室の中は薄暗い。

鼠色のヨットパーカーを着た男が立っている。

フードをすっぽりとかぶって。

身長はかなり高い。百八十から九十はある。

肩幅は広く、胸板もかなり厚い。パーカーの上からでもよくわかる。

表情はよくつかめない。ただ暗いだけではなく男の頭の向こうに電灯があるため、顔が影になっている。

男はじっと敬吾のほうを見つめている。

敬吾はうすら笑いをうかべながら、男の顔のあたりを見つめ返した。

こいつ、ホントにホモかよ...

あまりに威圧的な男のシルエットに、敬吾は迷った。

男の影がゆっくり動いた。

男の異様に太い腕が、自身の性器を触った。

小さなため息が敬吾の喉から流れ出た。

敬吾も男と同じように、股間のあたりを触る。

ああ、そうさ。おれもそうだよ、お仲間だよ。さあ、やろうぜ。

敬吾は目でそう訴えながら、男を見た。

個室のドアが大きく開いた。男の影が敬吾を誘うようにドアの影に隠れた。

完璧。オーケーのサインだ。

敬吾は素早く個室の中にすべり込んだ。

扉が乱暴に閉じられると同時に『行為』がはじまった。

男の唇が敬吾の口に押し当てられる。

舌が押し入れられる。唇が噛まれる。

細い身体が男の太い腕に抱きしめられる。

そして強く抱かれる。強く抱かれる。強く抱かれる。

苦しいよ。そんなに強く抱いちゃ。息ができないよ。

そう言おうとした敬吾の口と鼻が、男の口でふさがれた。

苦しい。苦しいよ。

敬吾は男に抱きすくめられ、呼吸器をふさがれたまま足をばたつかせた。

ふうっと意識が飛びかけたとき、身体が自由になった。

男が敬吾を抱いていた手を放した。

敬吾の意識は朦朧としている。

ぜえぜえとあたりの空気をすいこむ。

まずいよ。ひでえ奴にあたったよ。こいつサドくんだよ...

次の瞬間、魔法のように敬吾のズボンが下ろされ、男の性器が尻につきたてられた。

苦痛のうめき声が敬吾の口から漏れる。

痛えよ、痛えよ。信じられねえよ、こいつ。

男性同士の性交の場合、男女のそれのように挿入を潤滑に行うための体液が分泌されない。普通ならラブオイルとかいう潤滑剤や唾液を性器にぬりつけてセックスするのが常識だが、この野獣にそういう配慮はなかった。

男の巨大な体躯に比例した男根が、敬吾の内部に挿入される。

みりり、と小さな音をたてて敬吾の肛門近くの皮膚が裂けた。

深夜の個室トイレで、他人に知られてはならないことをしている。そんなことも忘れて敬吾は大声で悲鳴をあげた。

背後で男が満足そうに笑った。

敬吾の血が唾液の代わりに潤滑液になったのだろうか、男はさらに深く敬吾の中に入ってきた。

今度は直腸のあたりが音をたてている。

ずん。

野獣が敬吾に向かって深く突きたてた。

その勢いで敬吾は個室の壁に額を強く打ちつけた。

ずん。

また頭を打つ。

ずん。

たまらず顔を動かすと、今度は壁が頬骨を痛打した。

身体をそらし、頭をかばう。

ずん。

今度は肩。

ずうん、ずうん。

上方向に突き上げられるような痛み。

男が動きを止め、敬吾の上体を起こし、立ったままのしかかってくる。

敬吾は壁に押しつけられるような態勢になった。

ずうん、ずうん。

鈍い痛みとともに、身体じゅうが壁に押しつけられる。

内臓が潰されるかとも思うような痛み。

壁に押しつけられている間は呼吸さえままならない。

ひでえよ。殺されるよ。ひでえよ...

また元の態勢に戻される。

ずん、ずん。がつん、がつん。

頭、頬骨、肩、鼻骨。

男が動くたび、上半身のいろんな場所が壁にぶち当たり、低い音をたてる。

男は挿入したまま敬吾を抱き上げた。

プロレス技のように腕の上から敬吾を抱え上げ、ゆさゆさと身体をゆさぶりはじめた。

呼吸ができない。

胸のあたりに回された手で、呼吸器の動きが押さえられている。息が吸えない。

もう敬吾にはほとんど意識がなかった。

耳元で男が『ぐうっ』と声をあげたような気がした。

胸を抱きしめていた手が解かれた。

そしてその手が敬吾の首筋に伸ばされた。

ずん、ずん、ずん。

男は敬吾の背後で忙しく腰を動かしながら、男は敬吾の首をきつくしめた。

急速に目の前が暗くなり、同時に下半身の痛みが消えていく。

楽になれる。

首をしめられながら、敬吾は思った。

意識がなくなる直前、遠くで男の獣のような咆哮が聞こえた。

展望台 午後十一時四十五分

カズヤの前に二人のホモが正座させられている。

『お仕置き』の場所はホモトイレから展望台に移った。

ここは夜になるとトイレ以上に人目につかない場所だ。

この場所に移動してすぐに、カズヤは着ているものを全て脱ぐように二匹の獲物に命じた。衣服を剥かれると、『獲物』は抵抗しようとする気分をなくす。いつものカズヤの作戦だ。

それだけではない。これから始まるゲームのルールの中なかでは、こいつらが裸であるということとは必修条件なのだ。

獲物がしぶしぶながらも着ているものを脱ぐと、タクは手早くそれをまとめ、公園の闇に消えた。ゲームのための『仕込み』だ。

獲物たちが逃げないように、マサたちメンバーは周囲をぐるりと取り囲むように立っている。

獲物たちの正面にはカズヤ。ホモ二人組の前に仁王立ちしている。さっきも隙をみて逃げ出そうとしたオヤジの右頬にカズヤの回し蹴りがヒットした。射すくめるようなカズヤの視線にさらされている限り、こいつらには何もできない。

展望台とはいっても、あまりおおげさなものではない。

そこはちょっとした広場になっていて、広場の奥の一角からは運動公園や競技場、体育館などが一望できる。

しかし、ただそれだけの場所だ。

子供のころ、マサは父に連れられてよくこの広場で遊んだ。やがて競技場併設のサッカースクールに通い、子供なりに本気でJリーガーになろうと思っていた時期もあった。

いつからこうなってしまったのだろう。

正座している男たちの情けない背中をながめながら、マサは思った。

マサは十六歳。『普通に高校に行っていれば』高校一年になる年齢だ。

中学の半ばごろまでは、彼の人生はあらゆる意味でおおむねうまくいっていた。

親ともめることもなかったし、先生（センコーと呼ぶべきかな）とイザコザを起こすようなこともなかった。勉強もスポーツもそこそこなし、サッカーでは補欠ながら地域選抜選手に選ばれるような生徒だった。

中学三年になった春。彼の人生は破綻した。ある日、突然、マサへの『いじめ』が始まった。原因も理由も思い当たらない。同級生たちは一斉に彼を無視しはじめ、持ち物が頻繁になくなり、教科書やノートには毎日新しい落書きが書き込まれた。

『それ』はすぐに部活に飛び火した。

パス練習にも技術練習にもパートナーがない。

無視。

フォーメーション練習をしてもパスがまわってこない。

無視。

練習でも試合でも、マサはいつも一人、意味のない場所を走りまわっていた。

『彼は個人の技量で試合に勝とうとするタイプの選手で、チームワークを大事にするという観点からはあまり高評価を与えることはできない』

キャプテンもコーチも、部長も、マサの味方にはなってはくれなかった。

はじめて学校をさぼった日、ゲームセンターでカズヤに会った。カズヤは彼より一つ年上。中学のころはバスケットをやっていたらしい。

カズヤはスポーツ推薦で高校に進学した。面白半分に乗ったバイクで事故を起こし、選手として使えなくなったから学校から捨てられた、と過去を説明してくれた。

『バカだよ、みんな。いいじゃんか、学校になんかしがみつかなかたって。学歴なんかなくてもさ、それなりに楽しくやれる方法なんかいくらでもあるじゃんか』

カズヤの言葉で、マサは学校にしがみつくのを止めた。

親とも学校とも、これ以上揉めようがないと思えるくらいに揉めた。

特にマサを溺愛し、その将来に期待をかけていたという母親との感情的なもつれはどうしようもなかった。母は台所から文化包丁を持ち出し、マサを殺して自分も死ぬだの、学校の先生をコロシに行くだのと騒ぎ続けた。

しかしマサにしてみれば、ネガティブな意味で『学校からドロップアウトする』のではなく、ポジティブな考え方で『学校を見切った』のだから、両親たちの喧騒はまるで異世界の出来事だった。

しかし、彼にははっきりとわかっていた。ガッコウの奴ら、同級生はもちろん、先生も、そして親も。誰も信じることができない。マサにとって、親や教師が思っているほど、学校は絶対的な存在ではなかった。

マサは『学校に捨てられた』カズヤを信じた。

カズヤの言葉で、マサは学校を捨てた。

家族を捨てた。

マサもカズヤも、差別されてきた。

マサは理由のない理由で。

カズヤは選手として使えないから、という理由で。

だから俺たちは差別をやりかえす。

浮浪者を。酔っぱらいのオヤジを。気の弱そうなサラリーマンを。

良いコウコウ、良いダイガクにしがみつ、しがみつこうとしている奴らを。

そしてホモを。

俺たちは力で差別する。

それを間違っているだなんて言わせない。

展望台広場から出る道は三つ。

一つはマサたちがあがってきた、三号トイレや駐車場などのエリアに戻る道。この道は現役悪たれ中学生、ヨシキが見張っている。

もう一つは通称『コスモス山』の頂上に向かう道。これは一本道で、ただ頂上に向かうためだけにある道だ。秋になって秋桜が咲くころにはこの道を通して頂上まで登る物好きもいるらしいが、初夏の、しかもこんな夜中には無用のものでしかない。この道は今回初参加の新人、ハルユキが腕組みをしながら見張っている。奴は最近仲間に加わった男で、現役高校ラグビー部員だそう。何でもタクと中学のころつるんでいたらしい。

最後の一本の道は、陸上競技場やテニスコート、JRの春日公園駅へとつながる道である。マサはこの道の見張りを命じられた。

見張るといっても立っただけでいい。ホモたちが変な動きをすると、その時点でカズヤがシメてくれる。カズヤから逃げることができてもここから逃げるなどできない。それをあいつらに分からせるために俺たちがいるんだ。

カズヤの彼女のトモヨと、新人君・ハルユキの彼女アイコは、少し離れたところでオヤジの財布からせしめた戦利品を分配している。

駅につながる道から百二十五CCのオフロードバイクが姿を現した。

これはタクが駅前ですぐにいただいたものだ。ガソリンの残量がほとんど無かったが、今夜はバイクはもう使わない。明日になればまた新しいバイクを調達すればいい。

シートには武器調達係のタクがまたがっている。

そしてタクの後ろには、ユカがいる。

マサはつい一週間前まで毎夜のように自分の腹の下であえぎ声をあげていたその少女の肢体を思い描いた。

ユカも、悪くはないんだけど。

マサはモトカノ（と仲間は思い込んでいる）との三カ月間をほろ苦い思いで回想していた。ま、いいか。ユカにはタクみたいな明るい奴のほうがお似合いかもしれない。

二人とも、けっこういい顔で笑ってるじゃん。

マサは誰かを好きになるということが苦手だ。リーダーのカズヤの仲介で、半ばムリヤリつきあわされた二人だったが、どうにも上手くいかない。

本気で好きになれば...いつか裏切られ、無視されそうで。

そんな目にあうくらいなら、最初から好きになんかならないほうがいい。

好きだった女に、冷たく無視されることほど辛いことはないから。

『それに俺が本当に好きなのは、ユカ、お前じゃないんだ...』

バイクを降りたユカの姿が月あかりに照らされている。長い脚をことさらに強調するように短くカットされたショートパンツ。そこから見えるむきだしの白い太股が、艶かしく光っている。

「お待たせしましたあ」

いつもよりタクは機嫌がいい。

タンクトップからのぞいている彼の右肩には髑髏のタトゥーが入れられている。骸骨が踊る右腕

で金髪をかきあげながらタクがカズヤに言った。

「準備オーケーだぜ」

「よし、じゃあルールを説明してやるよ」

カズヤが口を開いた。

初参加のハルユキなどは『狩り』のルールをまだ知らない。ハルユキが連れてきた女、アイコもそうだろう。それ以上に、獲物の二人にとってはこのルール説明は不可欠だ。

「今、十一時五十分ね。おたくらホモ歴長いんだったら知ってるだろうけど、この公園の門は、JRの終電時刻、十二時三十分閉鎖されまーす。だから、十二時半までにこの公園から出て行ってくださいーい。俺たちは十二時半スタートでおたくらの『狩り』をはじめまーす。ルールはそれだけ。十二時半に間に合わなかった人は、明日の朝、門が開く午前六時までオレたちから逃げ回ってくださいーい。門以外から公園を出るのは禁止でーす。一応、オレたち、狩りのノウハウあるんで、門以外だとどこから出入りできるかわかってるからね。ルール違反のお友達は、スタンガンでおねんねしてもらおうか、ボウガンで狙い撃ちか、どっちにしてもそういう目にあってもらいまーす。いいかな？」

「裸で...門から出るのか？いや、出るんですか？」

つぶやくようにオヤジが言った。

「あっ、そうそう。お二人さんの服ね、さっきの放水作戦でびしょびしょになっちゃったから、公園のあっちこっちに干してあげてます。とりあえず、オジサンのパンツはコスモス山の頂上のどこか。お兄さんのパンツはテニスコートあたり。しっかり探してよね。鞆とか財布とかは没収でーす。服だけでも返してもらえるなんて、ありがたいと思ってよね、高島衣料、湾岸支店、課長補佐、三浦雄二さん。東洋大学三年生の黒木大介さん」

カズヤが冷酷に笑った。

「さあ、時間がないぜ。走れ」

この言葉が合図だった。二匹の兎はのろのろと走り出した。

獲物たちが消えてすぐ、チームの役割分担会議が始まった。

「じゃあ、チーム分けしようぜ。とりあえず、俺とトモヨ。新人のハルユキくんはお連れさんのアイコちゃんと。で、ユカは...」

ここまで言ってカズヤはちらりとマサを見た。先週までならユカのパートナーは間違いなくマサだった。自分に気をつかってくれているのだ。マサはカズヤに向かって小さくうなずいた。

「ユカのパートナーは、タクね。あとマサとヨシキ。これでいいかな？」

タクがユカを見て無邪気に微笑んだ。当のユカは、一瞬だけ意外そうな表情を見せたが、逆にほっとしたような笑顔をタクに返した。

「えっと、ハルユキちゃんとアイコちゃんは初参加だから、公園内の抜け道とかよくわかんないでしょ。だから、ゲート横のガードお願いしたいんだよ」

「ゲート横のガードって？」

見かけ通りの野太い声でハルユキがきき返す。

「えっとさあ、駅に行く道をまっすぐに降りたら、右手にトイレがあるんだよ。六号トイレっていうんだけど。そこからまっすぐ行ったら競技場や駅んところね。トイレから競技場の中央ゲートのほうに十メートルくらいいったところに、フェンスの切れ目があって、そこから外に出られるんだよ。公園から脱出できるのは、そこと、もう一カ所しかないから、ホモ君たちきつとその突破をはかるだろうと思う。ホモくんたちがきたらいじめてやってくれよ。持ち場としたら一番面白い場所だよ」

「はい。了解」

甘えた声でアイコが返事をする。

「別に逃げられたからって罰とかないし。今晚楽しく走りまわれたらそれでいいからさ。獲物が逃げても、名刺とか免許書とか押さえてるから、これから先いくらでもユスれるし」

「はあーい」

アイコがもう一度、返事をする。

「ハルユキ。えっちポイントは、ゲート横の自動販売機横のベンチ。ここだと販売機の陰になって何しても周りからは見えないから。がんばれよ」

お調子者のタクがハルユキに耳打ちしている。

「えっと、あとテニスコート横のガードは俺とトモヨね。あとの四人はチェイサー。それでいいかな？」

口々に了解の声があがる。

「じゃあマスク配りまーす」

タクが抱えていた袋からゴムマスクを取り出して、配りはじめた。

「何これ？」

初参加のアイコは、渡されたマスクを持ってキョトンとしている。

「いちおうさ、やばいことするわけだから、顔だけは隠さないよ。公園管理人とか、おまわりとか、絶対こないってわけじゃないし。でもマスク選びはタクの趣味。前のときは全員ホッケーマスクだったよなあ」

骸骨を模したゴムマスクを見ながら、ヨシキが言った。

「これだって気持ち悪いよお」

アイコはこういうマスクが気に入らないようだ。

「いちおう持っとけよ。顔、隠さないといけない時だけ使ったらいいから」

カズヤの言葉にうなずきながら、トモヨは前ポケットにマスクを押し込んだ。

「俺、これから髑髏のイメージでいこうと思ってんだ。ミスタースケルトン。かっこよくない？ タトゥーだって海賊ドクロだし」

「お前一人でやってろよ」

まんざらでもない様子でマスクをかぶりながら、ヨシキが言う。

「じゃあ十二時半開始ってことで」

カズヤが言った。

カズヤとトモヨは骸骨マスクを受け取らない。

これはチームの暗黙のルールだ。

リーダーだからというわけでもないだろうが、カズヤは常に顔を曝して行動する。

トモヨもいつかマスクをしなくなった。

しかしカズヤはチームのメンバーたちにはマスクを被って行動するように指示していた。

危険なことやヤバイことは全てリーダーである自分が引き受ける。だから覆面なんか必要ない

。

カズヤはそういう奴だ。

「あのさあ...今日さあ」

おどろおどろしい口調でタクが話しはじめた。

「俺さあ、見ちゃったんだよね。噂のムキムキホモ。ユカちゃんはたまたま見てなかったみたいなんだけど」

「はあ？何だよ、それ」

一番早く声をあげたのは最年少のヨシキだった。

「あれ、お前、びびってんの？」

「びびってねえよ」

不安そうな表情をしているユカに、タクが声をかけた。

「ムキムキホモってのはさ、ホモたちの間で噂になってる変態でさ、男同士のエッチしながら首しめたり殴ったりするSM野郎のことなんだよ。筋肉ムキムキで力とかも強いらしいぜ。そういう奴が出たら、返り討ちにしてやろうぜ。大丈夫。俺、こう見えても頼りになる奴だから。お子ちゃまのヨシキはこわがってるみたいだけど」

「うるせえ。お前こそ、逃げ遅れてムキムキホモにカマ掘られないようにな」

あちこちから笑い声が起る。

「おう、タク、バイク、ちゃんと始末しておけよ。あとさ、今日のホモ君の下着とかさ。どこに隠したんだ？」

「オヤジのほうはきっと見つからないと思うぜ。頂上んとこの、一番奥の草むらの中。若い奴のほうはね、競技場の倉庫に旗竿があったんだよ。国旗とかクラブの旗なんかつけて行進するやつ。そいつの先っちょにつけて、一番奥のテニスコートの真ん中に飾ってるよ」

「やりすぎだね」

「そうかもね」

「もしあいつがパンツ見つけられなかったら、テニスクラブの連中、明日の朝びっくりするぜ」

「なんせ黒のティーバック下着だったもんな...」

チームの男女の笑い声をかき消すように、公園内のスピーカーから『蛍の光』が流れはじめた

。

この音楽が止んだとき。

『狩り』が始まる。

インターローグ1

6

『私』は満足したわけではない。
もっと。もっと。
暴力を伴ったセックス。
相手は男性でも女性でもかまわない。
あえぎ声をあげ、よがる相手の顔を。
壁にたたきつけ、
壁の押しつけ、
その顔に拳をたたき込む。
そしてその首に腕をまわし、
絞める。締め上げる。
今日の相手はあまりにも早く気を失った。
中途半端に解放された欲望は、より強い刺激を求めている。
止まらない。止まらない。
解放したい。解放したい。
次に見つける者が男であろうと、女であろうと。
背後から抱きしめ、殴り倒し。
レイプする...
深夜の公園を徘徊する『影』は、ひたすらに獲物を探し求めていた。
頭がくらくらする。
公園のスピーカーから大音量で鳴っていた音楽が止まった。
遠くで、公園の鉄の門が閉められる重い音が聞こえた。
近くで、虫の声。
遠くで、蛙の声。
あまりにも騒々しい無音の中を、『私』は歩いた。
どれくらい歩いただろう。
遠くに競技場のゲートが見える。
どうやら公園をひとまわりしたようだ。
『さっきのトイレ』の前で立ち止まり、周囲を見まわす。
と。
自動販売機の近くに。
誰かいる。

解放したい。

止まらない。

『私』は獲物目指して歩を進めた。

...男のようだ。

相手は一人。

見ると、男の足元にゴムマスクのようなものがある。

面白い。

レイプのついでに、あれもいただこう。

『マスクの怪人』って奴か。

獲物を前に、『私』の筋肉は震えている。

『私』の身体の一部はこれから始まる解放の喜びを隠そうともせず、いきりたっている。

さあ、始めよう。

たっぷり『愛して』あげる。

いや、それだけでいいのだろうか。

『愛してあげる』こと、『レイプしてあげること』だけが、私の欲望を解放させる唯一の方法なのだろうか。

殴り、悲鳴をあげさせ、首をしめるだけであれだけの快楽を得ることができるのなら、もし相手が苦痛にのたうちまわりながら『死んでしまえば』、もっと素晴らしい快感を得ることができるのではないだろうか。

試してみる価値はありそうだ。

セックスなしで、ただ相手をいじめ、死なせることで得ることのできる究極の快感。

ターゲットはそこに、いる。

ゲート横 十二時三十一分

ハルユキはまだ決心がつかないでいた。

彼は自動販売機にずらりと並ぶダミー缶を見ながら、深くため息をついた。

今日、やるべきか。それとも今日は止めておくべきか。

もう一人の当事者、アイコはトイレに行くと言って闇の中に消えていった。

ハルユキは彼女の引き締まった、それでいてグラマラスな肉体を思いうかべながらも一度ため息をついた。

欲しい。彼女が欲しい。しかし。

今夜、ここで安易に男女の仲になってしまうことがためられる。

『彼女の気持ち』を一番理解しているのは自分であるはずだから。

しかし、いや、だからこそ自分にとって、アイコと男女としての一線を越えるチャンスは今日を逃すともう二度とやってこないかもしれない。

『そこらじゅうにスポット、ありだぜ』

『ハルユキ、えっちポイントは、ゲート横の自動販売機横のベンチ。ここだと販売機の陰になって何しても周りからは見えないから。がんばれよ』

とりあえず、やっちまってからでもいいかな。

それからじっくりと、これからの二人について話しあおう。

そうしよう。

気持ちが固まると、急にアイコが恋しくなってきた。

アイコ...

今日のアイコはパンティラインぎりぎりのミニスカートに白いタンクトップ。

『夜中、寒くなったらやだな』と言ってたから、ディパックの中にはハルユキが昨日プレゼントした紺のフード付きジャケットが入っているはずだ。

『じろじろ見ないでよお。恥ずかしいじゃん』

『スカート？短すぎないよ。それに見せパンはいてるもん。ほら』

『これの下？えへへ。ハルユキ、見たいの？勝負パンツはいてたりして』

彼女はコウコウでダンス部に所属しているそうだ。

毎日踊っているだけに、彼女の肉体はハルユキにとっては完璧に思える。そう、君は俺にとって完璧な存在だ。だからこそ今まで君に触れることさえためらっていた。

今夜。君は俺の物になる。

背後でゴソリと音がした。

アイコちゃん？

まじい。いかがわしい妄想で勃起しちまってる。

ハルユキは勃起してトランクスの中で窮屈そうにしている彼自身の位置をズボンの上から直し、振り向いた。

アイコではなかった。

ハルユキと同じくらい。いや、コウコウでもかなり背の高い部類に入る彼より一回り大きな『男』が立っていた。

誰だよ。こいつ。

『男』の右腕がゆらりと動いた。

ハルユキは反射的に身をかがめた。

空気を割くような音がして、ハルユキの頭の上を男の拳がかすめた。

何だよ。こいつ。やるのか？

ハルユキがそう思った瞬間、男の拳が腹にめりこんだ。

咄嗟に腹筋に力を入れたが、拳の直撃のダメージは大きかった。

鈍い痛みが内臓に響く。

ハルユキはその場に崩れるように倒れ込んだ。

こいつ、タクが言ってた...ムキムキホモ？マジかよ。

倒れているハルユキの身体に容赦なく男の蹴りが入る。

あまりの痛みに、意識が揺らぐ。

ラグビーで鍛え上げたハルユキの肉体だったが、こういう場合は少し勝手が違う。

走って、タックルして、相手をひきずり倒して。そういう肉体の使い方には自信があるが、何よりハルユキの手は人間を殴り慣れていない。

気力をふりしぼって、ハルユキは男の足にしがみついた。

タックル。

相手をひきずり倒すことができれば。

男は両腕でハルユキの背中や肩を殴りつける。

男の腕が身体にめりこむたび、視界が白くぼやける。

アイコ...どこにいるんだ。とりあえずここには来るな。逃げろ。誰かを呼んでこい...

口の中のどこかが切れているのだろうか。血の錆くさい味を感じながら、ハルユキはこの近くのどこかにいるアイコに呼びかけていた。

ハルユキは次第に自分の意識が遠のいていくのを感じていた。

ゲート横 十二時三十九分

やがて『男』はびくりとも動かなくなった。

『私』は『この男』の息の根を止めるにふさわしい武器を探すことにした。

棍棒、鉄パイプ、角材。野蛮な武器であればあるほど、男の鍛えあげられた肉体にふさわしいように思える。

自動販売機横の茂みになにかが見える。

『私』は一步踏み出し、足を止めた。

微かに右足に違和感がある。さきほどの格闘で膝を痛めたのだろう。

しかし大丈夫。これくらいなら目的を遂行することができる。

『私』はゆっくりとその茂みに近づいた。

武器の隠し場所のようだ。

草の下からは鉄パイプ・登山ナイフ・手錠。そしてボウガンが現れた。

『私』は鉄パイプを手にとった。

この重さ。悪くない。

『男』の足元にさきほどのマスクが落ちている。

『私』はそのマスクを手に取り、かぶってみた。

髑髏マスクの怪人。

その怪人が、週末の公園で時をすごす若者たちを一人、また一人と血祭りにあげていく。

最高だ。

足元で『男』が低く声をあげた。

まだ生きていたのか。

いいよ、すぐに楽にしてやろう。

『私』は鉄パイプを握りしめた。

握った手を。ゆっくり。大きくふりかぶり。男の頭めがけて。

鉄パイプを、振り下ろした。

頭蓋骨はもっと硬いものだと思っていたが、『私』の手に伝わってきた感触は硬質のものではなく、むしろ『ぐにやり』としたものだった。

男の身体がびくびくと震えている。

へえ。人間って、死ぬとき、こんな震えかたするんだ。

*

『私』はすっかり動かなくなった男の足首をつかんだ。

とりあえず、このままここに死体を置いておくわけにもいかない。

公園にいる他の奴らに警戒されるのも困る。

この男にふさわしく、人目につかない死体の隠し場所。

早くみつけないといけない。

『狩り』を続けるために。

土曜日（未明）・春日競技場運動公園

9

六号トイレ 午後十二時三十分

ぼたり。

水滴が頬にあたった。

狭いトイレの個室の中で、敬吾は気づいた。

自分がなぜこんな場所にいるのか、わけがわからなかった。

やがて、じんじんと痛む頬の痛みと、割れるような頭痛と、首筋の擦れたような違和感と、下半身のだるさが彼を現実にはひき戻した。

ひき下ろされたズボンも下着も、トイレの埃でどろどろに汚れている。

白濁した液体が、背中や腹に飛び散っている。それは、敬吾のTシャツまでも濡らしていた。

最悪だ。

トイレに備えつけられたペーパーでシャツや身体についた汚れをぬぐい、ズボンの汚れをはらって外に出た。

まさか...外で待ち伏せなんてないだろうな。

とりあえず、あいつと会うのはもうごめんだ。快感どころか...

殺されちまう。

細くドアを開け、周囲の様子をさぐる。

誰もいない。

敬吾はほっとして個室から出た。

同時に、頬や首筋の痛みが増してきた。下半身もしびれたように疼いている。

「ひっでえ」

つぶやきがトイレの壁に反響して消えた。

のろのろと手洗い場の前に立つ。

とりあえず、疼く頬と首筋を水で冷やす。

蛇口から勢い良く流れる水のしぶきが、ズボンやシャツを濡らすのも気にせず、敬吾は痛む場所を冷やした。

背後で何か硬い音がした。

あいつだ。

敬吾はふりむいた。

トイレ棟は何も動くものはなく、静まりかえっている。

ぼたり。

天井近くに設置されている受水槽から、水滴が落ちてパイプに当たり、硬い音をたてた。

敬吾は向き直った。

薄汚れた鏡に、頬を赤く腫らせた長髪の青年が映っている。

「ひっでえ」

敬吾はもう一度つぶやき、トイレ棟を出た。

時刻は十二時半を少し過ぎたところだ。

もう電車もない。歩いて帰るしかない。

公園の門も閉められている頃だ。

ゲートのところから出ようか。

敬吾はトイレ前のベンチに身をあずけるように浅く座った。

最悪。

ポケットから取り出した煙草に火をつけ、大きく吸い込む。

ちりり。

煙のせいだろうか。目のあたりが痛む。

目までどっかでぶつけたのかよ。

彼は火をつけたばかりのラクマイルドを吐き捨て、目をこすった。

と、そこに。

敬吾の正面に。

妙なものが立っている。

敬吾のベンチから五メートルほど離れて『そいつ』はいた。

人間の形をしている。

頭からネイビーカラーのフードをすっぽりとかぶり、骸骨のゴムマスクをかぶっている。

最悪。

またこいつかよ。

とりあえず、逃げよ。

敬吾がベンチから立ち上がろうとしたとき、ひょんと小さな音がした。

ちくりと下腹部が痛んだ。

最悪。なんだよ、あいつ。何したんだよ。

「なんだよ、オメーよお」

もうお前とかかわるつもりはない。そう意思表示するため敬吾は立ち上がろうとした。そのときやっと、敬吾は自分の身体に起こった異変に気づいた。

動かない。

敬吾はさっき痛みが走った下腹部を見た。

わけのわからない何かが、腹のあたりから生えている。

また小さな音が聞こえた。

見ると、今度は鳩尾のあたりがちくりと痛んで、同じ形をした新しい何かが生えた。

アルミか金属でできた、棒のようなもの。

矢のように羽がついている。

そのとき、敬吾はやっと気づいた。

これって、生えてるんじゃないじゃんか。刺さってんじゃないか。

矢が、俺の腹に、刺さってんじゃないか。

猛烈な苦痛が傷口からせりあがってきたのは、敬吾がそれに気づくと同時だった。

身体が引き裂かれるようなぴりぴりした痛みと、身体の内側からの鈍い疼き。

胃が形を変えようとしているかのような不快感。

意識せずに喉奥から漏れた声が、音にならずにひゅうと鳴った。

ドクロマスクが近づいてくる。

両腕で弓のようなものを構えている。

ボウガン？

冗談じゃねえよ。何だよ、おめえ。

叫ぼうとした喉の奥から、今度はどろりとした液体が流れ出た。

ごぼり、ぐぼり。

腹の奥から、胃液と血がまじりながら逆流してくる。

口からこぼれ出た赤褐色の液体は、薄汚れた敬吾のシャツとズボンを朱一色に染めていく。

最低。最悪。

ドクロマスクは歩みの速度をゆるめることなく、近づいてくる。

動こうにも動けない。腹に刺さった二本の矢が、身体を貫通してベンチに刺さっているのだろう

。

びく、びく、びくん。びくん。

敬吾の身体は、彼の意志に反して小刻みに痙攣をはじめた。

目の前が白く霞んできた。

弓矢の先が、敬吾の目のすぐそばまで迫り、そして止まった。

敬吾の『目』は、ボウガンの引き金にかけられた指がゆっくりと動くのをじっと見ている。

たん。と音がした。

眼球に何か当たる感触。

眼窩からどろりとした何か流れ出る感触。

頭の裏側が焼けるような痛み。

頭の後ろでカツン、と響く音。

ひっでえ...

それらの『痛み』が彼の最後の感覚だった。

敬吾の意識はこれまでとは異なり、急速に暗転した。

*

頭蓋骨を貫通した矢がベンチに突き刺さった。

男の身体は最後に大きく痙攣したが、やがてぴくりとも動かなくなった。

これが『私』の欲したことなのだろうか。

いや、まだまだこんなものじゃない。

『私』はまだ少しも満たされてはいない。

夜はこれからだ。

『私』はマスクをかぶり直し、次の『獲物』がいる場所を探した。

わんぱく公園 午前一時

およそ考えつくような遊びはやり尽くした。

三浦雄二が社会人としてスタートしたのは、日本じゅうがバブル景気に浮かれていたころだった。

彼は学生時代から、『事業』に手をだしていた。学生企業というやつだ。学園祭イベントのプロデュースからはじまり、夏のリゾート地ツアー、冬のスキーツアー、複数の大物アーティストをカップリングしての野外コンサート。有名バレー選手を招いて、海水浴場でビーチバレー大会を主催したこともある。

彼は大学生でありながら、サラリーマンが一生かかっても稼げないような金を手に入れていた。

それでいて彼は、『自分の取り分』のほとんどを在学期間中に使い切った。

クラブやキャバレーでの豪遊。海外への買春ツアー。カジノで一晩のうちに数百万単位の金をすったこともある。

彼の性への執着はこの時期に養われたものだ。彼の感覚では、複数でのセックスプレイなどむしろ当たり前だった。

一人の女性を複数の男性で犯す。逆に複数の女性と寝る。複数の男女が入り乱れての乱交。相手の女も金のかでどうにでもなった。人妻・コンパニオン・レースクイーン・AV女優・女子大生・女子高校生...十二歳の少女とセックスするだけのためにタイまで飛んだこともある。

金さえだせば、全ての好奇心が満たされる。

雄二の『性に対する感覚』は、大学卒業の時点で完全に麻痺していた。

雄二は大学卒業にあわせて学生企業と決別した。深い理由はない。学生サークルの延長のようなビジネスに厭きただけだ。

もっと大きな世界で、もっと大きな金を動かす。

彼の欲望はとどまることを知らなかった。

雄二はバブル景気で業績を伸ばし続ける『不動産業界』を選んだ。

彼が入社したのは、大手繊維会社の不動産部門であった。

土地は持っているだけで金を生む。それが海外であろうと、国内であろうと。

だが、その金の卵は持っているだけではおもしろみに欠ける。

運用。活用。

金も土地も、活用することによってより多くの富を生む。

雄二は莫大な利益を会社にもたらした。

そして彼は、『接待費』という名目でその利益の還元を受け、夜の町に金をばらまきながら女を抱き続けた。

しかし。

雄二がよりどころとしていた『実体のない経済』は突如、破綻した。

株価も、不動産価格も。

信じられないほど下落し、会社が抱えていた土地の資産価値は最盛期の二割にまで落ち込んだ。

誰がどんな手を打っても事態は好転しなかった。オフィスに座っているだけで面白いくらいにまとまっていた商談のすべてが凍結し、会社の業績は冷え込んでいった。

ここへきて雄二はやっと気づいた。

自分がこれまで築きあげてきたものにもまた、実体はなかったのだと。

彼の属する会社は縮小と再編を繰り返し、母体の繊維会社本部の『資産管理室』と名付けられるまで収縮した。

再編の波のなかで、雄二は子会社からさらに取引先の子会社へと所属を変え、今の場所をあてがわれた。高島衣料・湾岸支店・課長補佐。

契約書一枚で数億円の取引の世界から、ブラウス一枚を売って数百円の利益を求める世界へ。

そして雄二には、性の衝動と性の欲望だけが残された。

およそ考えつくような遊びはやり尽くした。

ただ一種類の遊びを除いては。

『男』と寝ること。

『男』とセックスすること。

それだけが雄二のやり残した遊びだった。

タイで十二歳の少女を買ったとき。

手配師の若い男が、雄二の耳元でささやいた。

「カワイイ、オトコノコ。オンナノコヨリ、チョットタカイケド、イルヨ」

バカか、こいつ。

そのときはそう思った。しかし、男のカタコトの日本語が鼓膜の裏側にはりついていつまでも残っている。

バブルが崩壊し、全てを失い。

男の囁きは澱のように頭の隅にこびりつき、『あのとき』よりも鮮明に繰り返される。

「カワイイ、オトコノコ」

女を買う金なんて、今はない。女につき込む金もない。

「カワイイ。オトコノコ」

ホモの男とはどうやって出会うんだろう。

急速に成熟しつつあるネット社会で、『男』とセックスするための情報を手に入れることは、むしろたやすかった。

自宅近くのネットカフェ。プロパイダーの検索画面にキーワードを入力。『ゲイ 出会い系』。エンターキーを押す。

その瞬間から、雄二は坂道をころがり落ちるようにゲイの世界へのめり込んでいった。

今思えば、『それ』は危険な匂いのする書き込みだった。

「ヨシキ 十五歳 中学生です。まだ経験とかないけど、♂同士のエッチに興味あります。年上で、三十五歳以上の人、いろいろ教えてください」

書き込みをみつけた雄二は躊躇することなくメールを送った。

返事はすぐに帰ってきた。

経験ないけど興味あります。名前は？...ユウジ？ユウジさんって呼んでいいですか？仕事は何してるんですか？...会社ではえらい人なんですか？...スポーツですか？部活で陸上やっています。冬でも短パンはいて走ってますよ？見たいですか？...僕とえっちしたいですか？僕はすぐにでも会っていろいろ教えてほしいなあ。...いつがいいですか？...えっちだけじゃいやだな。食事とかごちそうしてくださいよお。お茶だけでもいいけど。...どこで会うんですか？...ええートイレでやるんですか？初めてだから、ちゃんとしたところでやりたいなあ。ホテルとか使わないんですか？...車とかでもべつにいいけど。でも覗かれたりしたら恥ずかしいなあ。初めてのえっちって、思い出になりそうだから、本当はホテルとかのほうがいいんだけど。...すいません、わがまま言って。...じゃあ公園のトイレとかで待ち合わせして、そこから車でホテルとか連れて行ってくださいよお。...僕、はじめてでよくわからないんだけど、どんなことするんですか？...ええっ？そんなことするんですか？じゃああそこちゃんと洗っておかないと。...飲んじやったりもするんですか？すごい。すっげえ期待して行きますね。...ところでえっちの前って、ためておいたほうがいいのかなあ。...じゃあ前の日は我慢しといたらいいんだね。...実は僕、さっきからびんびんです。見てもらいたいくらい。...画像メール？僕の携帯、古いからカメラついてないんです。...あと、お願いしていいですか？実はおこづかい、困ってるんです。助けてくれませんか？

話がセックス以外の方向に移ろうとすると、身体をイメージさせるメールで話を元に戻す。メールのたびに当日の『デート予算』がふくらんでいく。

だが、雄二は『少年とのセックス』の妄想の虜になっていた。

それにしても、こんな目にあうとは。

抱いた後に金を要求されることは覚悟していた。二、三万も握らせれば充分だろうと思っていた。甘かった。あんな奴らがバックにいたとは。

身ぐるみ剥がれるというのはこういうことだ。

素肌の上にやっと見つけたスラックスを履いただけの姿で、雄二はあの日、『ヨシキ』に不用心なメールを送った自分を呪った。

それにしても。上着はどこにあるんだろう。

ずいぶんと走り回ったが、見つからない。

あのブタガキめ。調子こきやがって。

草むらに隠れていると、藪蚊が集まってきてかなわない。

雄二はのろのろと草むらから這い出した。

雄二が隠れていたのは『わんぱく公園』と名前のつけられた児童公園である。

巨大なすべり台やトリム施設などがこの一角に集められている。

まさか奴らもここまでは上がって来ないだろう。

この『わんぱく公園』は競技場公園の東端になる。『コスモス山』の展望台や三号トイレは西端、駅や競技場ゲートは中央あたりになるから、奴らがあえてここに目星をつけない限り、安全だ。

雄二はタイヤでつくられたブランコに腰をおろし、大きく深呼吸をした。

落ち着け。落ち着け。

あのガキどもには、考えられる最高に残虐な方法でお返ししてやる。

そうだ。不動産業界にいたころ、地上げや追い立てにその筋の者を使ったことがある。あいつらに頼もう。

ああいう奴らの中には、刑務所で男を知って帰ってくる連中もいると聞いている。

まず奴らを拉致する。

女は、男のしている前でレイプする。

男も、女の目の前でホモのスジモノにレイプさせる。

リーダーの茶髪と中学生のガキだけは別だ。俺が犯す。

その後は。

コンクリートを抱かせて海に沈めてもいいだろうし、山に埋めてもいい。

『あのころ』、うるさい奴らを黙らせるために、俺がそうしてきたように。

雄二の理性や自制心の籬は、すでに崩壊しつつあった。

彼の『はじけ飛んだ』経歴の中には、結果として他人をコンクリート詰めにしたたり、生き埋めにしたりのようなこともあったかもしれない。『うるさい奴ら』を黙らせるための恫喝の手段として、『海に沈める』だの『山に埋める』だのという文言もあっただろう。また、それくらいの手を使ってでも相手を黙らせなければ仕事が進まないぞ、と部下に檄をとばしたこともあった。

しかし彼は一度として他人に手さえあげたことのない男だった。

汚い仕事は全て部下にやらせた。

彼の自信も、信念も。やってきたことも、発想さえも。

空虚なものであることに、彼はまだ気づいていなかった。

*

「おじさーん、みいつけた」

ブランコに惚けたような表情で座っている『獲物』に背後から近づき、タクは言った。そして言い終わると同時に、そのむきだしの背中に回し蹴りを入れた。

男はブランコからずりおちるよう膝をつき、唸り声をあげる。

「オラオラ、どうしたよ？逃げなきゃケガしちゃうぜ？」

今度は腹に蹴りをぶち込む。

半裸の男は土の上に倒れ込んだ。

「おい、ねんねは早いんじゃない？もっと遊ぼうよ、ホモのおじさん」

五メートルほど離れたところからユカが見ている。

かっこいいところを見せてやらないと。

さっきバイクに乗せてやったのは大正解だった。

あれで二人の距離がぐっと近づいたような気がする。

ユカは子供のように大声ではしゃいでいた。

俺はお前のそういうところが、好きだったんだ。ずっと。

タクは倒れた男の髪をつかみ、ゆっくりとひき起こした。

ユカ。好きだった。ガキのころから。

タクは男のミゾオチを殴る。殴りつける。

どうだ。俺、かっこいいだろ？男らしいだろ？ユカ。

タクはちらりとユカを見た。

ユカは、タクを見ていなかった。じっと顔をふせ、何かをこらえるような表情だ。

どうしたの？ユカ。

「もう止めてよ...タクちゃん」

ユカの唇がそう動いた。

タクを包む空気が一瞬、凍りついた。

そのときだった。

鳥のような声をあげて、ホモオヤジがタクの腹に拳を叩きつけた。

タクの身体は勝手に腹をかばうように丸まった。

次は首筋に鈍い痛み。男の手刀が肩口あたりに当たった。

目の前がじわりと白くなった。しかしその痛みはすぐに治まった。同時にじりじりとした『ホモオヤジ』に対する憎しみが湧きでてきた。

「てっめえ、ブツ殺すぞ」

腹を押さえたまま、タクは男をにらみつけた。

男は駅に通じる小道を逃げだした。

「待ておらあ」

反射的にタクは追おうとした。そのとき、ユカの叫びにも近い声が背後から聞こえた。

「タクちゃん、行かないで。もう止めてよ」

わけわかんねえ。

ユカの声でタクの足は止まった。

タクはゆっくりと振り向いた。

『どうしたんだよ、ユカ』

そう言おうとした声を飲み込んだ。

ユカは泣いていた。

テニスコート横・スリーオンスリーコート 午前一時十五分

ひゅっ、と息を吐きながら、カズヤはボールを投げた。薄汚れたバスケットボールはゴールリングを通り抜け、ゴールポストの真下に落ちた。

「すごい。相変わらず百発百中じゃん」

トモヨが歓声をあげた。

「たいしたことねえよ」

ホント、タイシタコトネエヨ。俺なんて。

カズヤは音をたてながらサイドラインにむかって転がるボールを拾い上げた。

小学校でも中学校でも、自分はバスケットではヒーローだった。まとわりつく敵を抜き去り、味方にパスをだす。自由自在にコートをかけまわり、敵の裏をかき、シュートをきめる。面白いように点が入り、自校のギャラリーたちは歓喜する。

カズヤの一番好きな自分だ。

カズヤはボールを拾った場所から、ゴールポストに向き直った。

かなり角度がある。

カズヤは小さく息をはきだしながら、ゆっくりと腕を曲げ、ためこんだエネルギーをボールとともに放った。

ボールは大きな放物線を描き、ゴールポストめがけて飛んだ。

カズヤのシュートは、向こう側のゴールリングに当たり、その勢いでゴールからはね出してポストのななめ下に落ちた。

「惜しい。残念」

トモヨがつぶやくように言った。

「本当、たいしたことねえな。俺...」

彼女に聞こえないような小さな声で言った。

入ってたよ。中学のころの俺なら。

和也がスポーツ推薦で入学したコウコウは、私立の新設校だった。学校側はやみくもにスポーツ推薦の生徒を集めて実績を作り、ガッコウの評価を高めようと必死だった。

『あんな学校じゃ、一年レギュラーなんて楽勝じゃん』

同級生も、中学の先生も、親も。そして和也自身もそう思っていた。

しかし。

その『コウコウ』には腐りきった『センパイ』たちが待っていた。

身長差・体格差は技術では埋めようがない。

和也は入部初日からひとまわりもふたまわりも身体のかな先輩たちに徹底的にマークされ、全てのプレイをつぶされた。

同級生は誰ひとりまともに喋ってはくれない。

先輩が怖いからだ。

チームメイトは誰ひとりとして、和也のプレイについてこれない。

いや、誰も彼のプレイに合わせてようとしない。

和也は常に孤立していた。

プレイヤーとしての芽は、どんどん摘み取られていった。

バイクに乗ろうと言い出したのは、部活の先輩だった。

『お前さあ、まじめすぎるんだよ。バイクにでも乗るようなやんちゃなところがあったら、俺にだってお前のこと、いいように言ってやれるのにさあ。どうだ？バイク、乗ってみるか？』

近くのコウコウとの定期交流試合の一週間前。

バイクのブレーキワイヤーが甘く調整されていたことは後で知った。

その先輩が自分の代わりに交流試合にスタメン出場したことも、自分がバスケット部を除名されたことも、無免許運転で学校を退学処分にされたことも。和也は病院のベッドの上で聞かされた。

。

汚ねえ。あいつら、最悪。

今でも和也の膝には鉄のボルトが入ったままだ。

退院し、リハビリを続ける少年に、かつての友人たちは誰ひとり近づいてはこなかった。

『トモヨ』を除いては。

「アタシ、まだシュートとかできるかなあ...」

ウエストラインが低い、スリムのジーンズ。ヘソ出しのノースリーブの白いサマーセーター。

ローカットでブルーのスニーカーをはいたトモヨがボールを取りながら言った。

彼女はフリースローのポイントに立って微笑んだ。

「賭けようか。フリースロー入るか」

「何を？」

「んとね。アタシのシュートきまったら、ひとつだけ、カズヤはアタシの言うことなんでも聞くの。外したらアタシがカズヤの言うこときいてあげる。どう？」

「いいよ」

トモヨはじっとゴールを見つめている。

ゆっくりとふりかぶり、トモヨはボールを投げた。

トモヨが俺に聞いてほしいお願いって何だろう...

空中でゆっくりと弧を描き、ゴールポストに向かって伸びていくボールを見ながらカズヤは考えた。

トモヨのシュートは、ゴールにかすりもせずにポスト前に落ちて乾いた音をたててバウンドした

。

「ちえっ。だめだこりゃあ」

トモヨはけらけらと笑った。

わざと外したんだろ？トモヨ。

お前だって女子バスケット部のエースだったじゃないか。

そんなお前が、フリースローを外すなんて。リングにかすりもせずに外すなんて。

さっき、俺がシュート外したからだろ？

カズヤにはそれがわかっていたが、声に出されることはなかった。

「カズヤ、約束。何でも言うこと聞いてあげるよ」

トモヨが甘えた声でそういったとき、カズヤの携帯が鳴った。

タクからだった。

『獲物』のうちオヤジのほうgteイコウした。

まあ、そういうホモだっているだろうな。

大丈夫。今日はべつに逃げられてもかまわない。

明日から。

徹底的にやる。破滅させてやる。

抵抗するような奴じゃなければ、金をむしりとるくらいで勘弁してやるが、反抗は許さない。

あらゆる手段を使って、あいつがエンコーホモオヤジであることをばらす。

電話、ファックス、ホームページへの書き込み。

ターゲットはあいつ個人なんかじゃなくて...あいつの会社。

高島衣料。

そして、高島衣料のホームページ。

そこに載っている、高島衣料の取引先。

それはそれで楽しめるゲームになる。

カズヤは冷静な声でタクに言った。

「とりあえず、あのホモオヤジをみつけたら注意するようにみんなに連絡まわしてくれ。オヤジのほうケジメつけるまで大学生は無視してていいから。で、誰かがオヤジをみつけたらそこに集合して、オヤジをシメる。いい？」

「了解。あのさ、カズヤ、俺、いろいろあって、すぐには動けないんだけど。いいかな」

「別にいいよ。みんなに連絡だけつけといてくれたら...オレも今いいところだからすぐには動けないし。意味わかるでしょ？」

「オッケイ」

「よろしくな」

カズヤは電話を切った。

「すぐ行かなくてもいいの？」

「いいよ、別に。こっちには切り札あるし。逃げられてもいいんだよ。今日のところは。みんながケガしたりしない程度に遊べれば。でもさあ...」

「何？」

「飽きてきちゃったのかなあ。あんま面白くなくなってきたよな、ホモ狩りも」

「じゃあ、また違う遊びする？」

「そうだよな。そろそろソツギョウしよっか。ホモ狩りから...」

トモヨの表情が明るくなった。

「そうだよな。お前、ずっと言ってたもんな。」

「日本一目指すとか、大会で優勝狙うとかじゃなくて、俺とバスケしたいって。」

「俺とバスケしたくて、俺のそばにいるんだよな、お前は。」

「なあ、トモヨよお」

「何？」

「俺がさあ、フツのバイトとか始めるって言ったら、笑う？」

「全然。そのほうがうれしいかも。そしたらアタシも普通のバイトするよ」

「でさ、休みの日とかにバスケとか始めたら、ヘンだと思う？」

「思わないよ。バスケしてるカズヤ、好きだもん」

「足にボルト入ってる奴がバスケなんて、ヘンじゃん」

「変じゃないよ。もしカズヤが昔みたく走れないんだったらさ、アタシが走るから。カズヤはアタシにパスくれて、ゴール前で待っててくれたらいいんだよ。アタシ、カズヤにならいいパス返す自信あるよ」

「...練習とかしてみようか」

「うん」

トモヨはちょこちょこ走って、転がったままのボールを手に取った。

「外したのに、願いかなっちゃった...」

小さな声でトモヨが言った。カズヤは聞こえないふりをして聞き返した。

「今何か言った？」

「何でもないよ。ひとり言」

トモヨはゴールに向き直り、無造作にボールを投げた。

ボールは吸い込まれるようにポストに向かって飛び、当然のようにリングを通過した。

「トモヨ。何でも言うこときいてくれるんだよな...」

「約束じゃん」

「じゃあ、セックスしようぜ。いつものベンチで」

トモヨは微笑んで、小さく頷いた。

わんぱく公園 午前一時二十分

「ダメだ。ハルユキだけつながらねえよ...」

タクはイラつきながら言った。

「電源切って、二人でいちゃいちゃしてるんじゃないの？」

「呼び出しはしてるんだけど。仕方ねえなあ...ゲートまで行こうか」

「ん。もうちょっとここに座っていたい」

ったく。わけわかんねえな、こいつ。

「いいけど。ところでさ、ユカちゃん。さっき、どうして泣いたの？」

「...タクちゃんが人を殴るの、見たくなかったんだよ」

は？ますますわけわかんねえ。

「タクちゃん、覚えてる？小学校のときのこと」

は？

「五年生のときのこと。運動会のクラス対抗リレーで、ユカがアンカーで。私たちのクラス、トップだった。ユカ、コーナーのところで、足をすべらせてころんだの」

覚えてるけど。

「結局クラスはビリになって、みんな、すごく怒ってた。男子は口に出して文句いうからまだよかったんだけど。女子のみんななんか、一週間くらい口きいてくれなかった。でもね、男子の同級生の一人が、ユカに元気をくれたんだよ」

覚えてるけど。

「その子、ちょっと太ってて、運動なんかあまり得意じゃなくて。体育だけが取り柄のユカとは正反対の子だったなあ。その子とは小さいころはよく遊んだけど、小学校には行ってからはほとんど話とかしなかったし、それからあまりしゃべったりしなかったけど。その子がね、運動会の帰り、一人で家に帰るユカに言ったんだよ。『ムラカミい、お前、こけちゃったけど、かっこよかったぞ』って。『最後まであきらめないで走ってるお前の顔って、ちょっとかっこよかったぞ』って。その子、それだけ言って、逆方向へ走って帰った。それだけユカに言うために、遠回りしたみたいだった。失敗しても、頑張ったら誰かが見ていてくれる。そういうことを教えてくれたんだよ、その子は...」

覚えてる...

「その子、中学になったらどんどん悪くなって行って、私のことなんか忘れてしまったみたいだった。私にそういうこと言ってくれたこと、忘れたみたいだった。私は普通に中学生して、普通にテニス部して、普通に受験して、その子とはどんどん離れていった...」

それも覚えている。

「でもね、第一志望のコウコウ落ちて、中学校の自分が心のどこかでバカにしてたコウコウに入って、友達の影響で少しずつ悪くなっていった。そのおかげでゼンゼン話とかしなくなってたその子とまた話とかするようになって。それで気づいたんだよ。その子って、小学校のときのまんま、ちっとも変わってなかったんだよ」

ユカ。

「中学に入って変わったのはね、その子のほうじゃなくて、アタシたちのほうだったんだ。ガッコウとか、センセイとか、ジユクとか、親とか。そんないろいろな邪魔なものが周りにあって、見えなくなってたんだ。その子の本当の姿が。その子、びっくりするくらい、小学生のころのまんまだった。なんか、涙がでそうになるくらい、変わってなかった」

(ムラカミい、お前、こけちゃったけど、かっこよかったぞ)

そうだよ。あのときのお前、ホント、かっこよかったもん。

「本当はね、小学校の運動会のあの日から、タクちゃんのこと...ちょっと好きだったんだぞ...」

(最後まであきらめないで走ってるお前の顔って、ちょっとかっこよかったぞ)

喉がからからだ。

「俺はそのずっと前から...ユカちゃんのこと、好きだった」

やっと声がでた。

「タクちゃん、変わっちゃいやだ。人を殴るタクちゃんなんて見たくないよ」

ユカの目に涙がたまっているように見えた。

「わかったから、ユカちゃん。もうユカちゃんの前では暴力とかは止めるから」

「今度さ、またバイク乗せてよ。今日みたくパクったバイクじゃなくて、タクちゃんのバイクに...」

「いつでもオーケーだよ。俺のバイクの後ろ、ユカ専用にしてもいいよ」

ユカが少し笑った。

「なんか、変な回り道しちゃったね」

「え？」

「知ってるんでしょ。アタシとマサくんとのこと...」

「いいよ。気にしないし。俺」

「タクちゃん、彼女いないって言ってたよね。タクちゃんの彼女、アタシじゃだめ？」

こういうことは...俺から言わせてくれよ

返事の代わりにタクはユカの肩を抱いた。タクの肩にユカの髪がかかった。

タクはユカの頬に手を伸ばした。

どうするんだっけ。こっからどうしたらかっこよくキスできるんだっけ。

ユカの顔がすぐそばにある。タクの顔を見ていたユカがゆっくりと目を閉じた。

ユカの唇が、かすかにタクの唇に触れた。

思っていた以上にユカの唇は柔らかかった。

ずっと、ずっと想い続けてきたユカが、目の前にいた。

村上由佳と石橋卓哉。

二人は『幼なじみ』という言葉でくくられる関係だった。

由佳にも卓哉にも兄がおり、その兄が同級生同士だったため、幼い二人は兄のお供でよく公園で遊んだ。いや、『兄たちの都合で』遊ばされていた。

由佳の家庭は母子家庭だった。父と母は『複雑な理由があって』別れたのだと由佳は聞いていた。

由佳の父は『ケイムショ』に入っているのだ、ということを知ったのは小学校四年のころのことだった。このころからユカはあまり友人とは喋らなくなり、クラスでも一人でいることが多くなった。

村上由佳をじっと見つめ続けていた少年、石橋卓哉は彼女の変化を敏感に感じていた。彼は彼女よりも早く、兄たちから聞いて彼女の『父』のことを知っていたのだ。

卓哉はというと、由佳とは逆に母を知らない。気がついたときから、家には祖母しかいなかった。父は仕事で遅くなる日が多く、小学校にあがってからはろくに父と過ごした記憶がない。

そんな卓哉だから、彼は由佳の変化を誰よりも早く感じとり、誰よりもその変化に胸を痛めていた。

しかし。

卓哉も由佳も、もう『幼なじみ』ではなかった。

由佳はどちらかというと活発で運動好きなタイプ。

卓哉は体育も勉強もできない、悪ガキタイプ。

わずか数年の間で、二人の小学生の間には見えない溝が生まれていた。

声をかけようと思って。

励まそうと思って。

卓哉は由佳を見つめていた。

無邪気に笑う顔がもう一度見たかった。

由佳と笑顔で語り合いたかった。

見つめるうち、想いはつのっていった。

小学校五年生の運動会の日。

やはりその日も、卓哉は黙って由佳を見つめるだけだった。

フォークダンスのときも。騎馬戦のときも。観覧席にいるときも。

卓哉はななめ後ろの自分の場所から、由佳の後ろ姿を盗み見るようにながめては、ため息をついていた。

やがてクラス対抗リレーがはじまった。

由佳はアンカーだった。

四組のクラスのうち、トップで由佳にバトンが渡った。

由佳がかけだした。

ぐん。ぐん。ぐん。

加速度が音になって聞こえるような気がした。

クラスメートの誰もが由佳の名前を叫んでいた。

卓哉を除いて。

卓哉は、声をあげることもなく、ただ、見つめていた。

由佳の顔を。髪を。肩を。足を。

誰よりも早く由佳はコーナーにさしかかった。

そのとき、ゆらりと彼女の上体のバランスが崩れた。

このとき声をあげたのは逆に卓哉が最初だったかもしれない。

由佳は膝から崩れるように前のめりに倒れた。

その横を他のクラスの選手が走りぬけていく。

卓哉の周囲からはため息のような不平の声が一斉にあがった。

由佳はわずかに涙がにじんだように見える目で、自分を追い抜いた走者たちの後ろ姿を睨んだ。

そして、落としたバトンを握り直し、走り出した。

負けない。そんな表情で。

ぐん。ぐん。ぐん。

これまでよりもはるかに早く、由佳は走った。

卓哉の胸がどきん、と鳴った。

失望と不満の大合唱の中で、卓哉だけが由佳の走る姿をじっと見ていた。

結局、由佳は最後にゴールに駆け込んだ。あと数十センチで前を走る走者を追い抜かすような勢いだった。

彼女が転倒して、クラス順位がトップからビりに転落した事実は変わらない。

しかし、卓哉には、いや、卓哉にだけは、ゴールの由佳は誰よりも輝いているようにみえた。

倒れたって、また走ればいい。

あきらめちゃいけない。

(タトエ オヤガ フタリ ソロッテイナクテモ...)

運動会のあの日、元気をもらったのは由佳のほうではなく、卓哉だった。

タクはユカをベンチに押し倒した。

限界だった。

「ユカちゃん、ユカちゃん」

子供のように少女の名前を呼びながら、ユカの唇を求め続ける。

ユカのタンクトップがたくしあげられて、まだ成熟しきっていない乳房が露になった。

タクはその乳房を激しく揉みしだき、乳首をなめまわす。

「痛いよ、タクちゃん。それに...重い」

ユカが小さく言った。

あわてて身体を離しながらタクがつぶやく。

「ごめん。俺、よくわかんなくて...」

ユカはタクの手を自分の乳房に導いた。

「やめなくてもいいの。やさしくしてくれたらいいから...」

優しく。優しく。

「こんどはキスして。おっぱいに...」

優しく。優しく。ちくしょう、わかんねえ。どうやっていいか、わかんねえ。

ユカはタクの『初めてのとまどい』を察したようだった。

「タクちゃん、下、脱いで座ってごらん」

「え？」

「タクちゃんのはじめての人に、なったげるから」

破裂しそうに心臓がバクバクいっている。

言われるまま、ズボンと下着を下ろした。丸々と太った腹の下に、その体型にはあまりに不釣り合いなペニスがついている。

いつのまにかショートパンツを脱いだユカが、タクの腰にまたがった。

「キスして」

「おっぱい、吸って」

「反対側も、吸って」

タクにはユカの指示に従うのが精一杯だった。

すっ、とユカがタクのペニスを握った。

えっ？

タクはユカに包まれた。

すげえ...

その瞬間、少年は射精していた。

まずい...

「ユカちゃん、ごめん。俺、いっちゃった...」

早すぎるし...

「えっ？」

出しちゃったし。しかも中に。

少女は少年の泣きそうな顔をしばらくみつめ、微笑んで言った。

「もし、今のでデキちゃってたら、ちゃんと責任とってよね。タクちゃん」

「え？」

「タクちゃんだったら、いいよ。ずっといっしょにいても」

タクはやさしく少女を抱きしめた。

ユカは強く少年を抱きしめた。

風が吹いて草が鳴った。月がわずかに陰った。

テニスコート奥・ベンチ 午前一時三十分

カズヤはトモヨを抱きしめた。トモヨは小さく声をあげた。

充分すぎる前戯の後、二人はどちらからともなく全裸になった。

この場所は生い茂った植木の影になっている。どこからも見られる心配はない。

熱く、長いキスを交わし、そこから形の良い胸へと舌を這わせる。

鎖骨あたりから乳首にかけて、カズヤの唾液の線が残った。うっすらと汗が浮かんだトモヨの肌を月の光が艶かしく照らしている。

カズヤはトモヨをベンチに座らせた。そしてトモヨの股間に顔をうずめた。

歓喜と恍惚が交錯した表情で、トモヨは喉から声が出そうになるのを耐えていた。

トモヨ。

和也は半年で高校を中退した。

そこからはゲームセンターや夜の盛り場が居場所になった。

最初は力を持っていそうなグループに入り込んだ。

強い奴、弱い奴。強いグループ、弱いグループ。

それを見極めるのはバスケットの試合で敵チームのキーマンを見分けるのに似ていた。

強い奴らは独特の共通した雰囲気を持っている。そいつを嗅ぎ分けることができさえすればいい。

強い奴は強い味方を常に欲しがっている。

ただし、強すぎる奴は敬遠される。

これがルールだ。

それさえわかればゲームは簡単だった。和也の入ったチームはまたたく間に複数のチームを取り込み、勢力を拡大していった。

何も難しくはない。他の弱そうなチームの『使えそうでほどほどに強い奴』を自分のチームにリクルートすればいいのだ。そうすれば相手チームは自然と弱体化し、相対的に和也のチームは強くなる。

和也は自分の所属するチームを強化しながら、自分自身のグループを作っていた。

仲間を選ぶ基準は難しいものではない。

彼自身が『放っておけない』と思った奴。

彼自身が『自分が感じた痛み』を共有できると判断した奴。

強い・弱い・使える・使えないは関係なかった。

和也自身が一緒にいて楽しめる『仲間』が欲しかったのだ。

むかしの『バスケのチームメイト』のように。

最初に仲間になったのは知世だった。

彼女は和也の中学時代の後輩で、彼の卒業と入れ違いに女子チームのキャプテンになった。

そして彼の翌年、和也を『放り出した』コウコウにスポーツ推薦選手として入学した。

そしてわずか三日で自主退学した。

「三日で退学かよ。度胸あんなあ。お前...」

最初のうち、知世はコウコウへスポーツ推薦で進学したものの、練習のキツさについていけずにケツを割ったものだとばかり思っていた。

しかし、実際のところは少し違っていたようだ。

チュウガクのコーハイから『噂話』として、知世の武勇伝が流れてきた。

彼女は、『そのコウコウ』の『そのバスケット部員たち』をつぶすつもりで推薦を受けたのだ

。彼女の強烈なラフプレーで、初日で女子バスケ部は活動不能の状況となった。

二日目から知世は男子チームに混じって練習するように指示された。

男子チームの主力選手のほとんどがたった一人の女子新入部員に潰された。

卑劣な先輩たちは、練習終了後、知世を呼び出して制裁を加えようとしたらしいが、はなから彼女はケンカをしにガッコウへ入学したらしく、『制裁』に参加した部員のほとんどは夏近くまで病院の壁を眺める毎日をおくるはめになったらしい。

退学届を出すまでのたった二日で、そのコウコウのバスケット部は『部員のほとんどのケガ』というとんでもない理由で、春の新人戦のエントリーを取り消さなければならなくなった。

この『噂話』を聞いた和也は、知世に真偽を確かめた。

「...」

「ん...本当はね、アタシ、コウコウなんて行く気なんてなかったんだあ」

「...」

「目標なくなっちゃってさあ、チュウガク三年のときに。それまではアタシ、バスケに燃える少女だったんだけどな」

「...」

「目標？和也だよ。決まってるじゃん。和也と同じコウコウで、和也と同じ体育館でバスケしたかった。それだけ」

「...」

「バカじゃないよ。アタシの人生の中では、コウコウなんてそれぐらいの値打ちしかないの。だから、くだらないプライドでガチガチのコウコウバスケ部だから、メチャメチャにしてやれたんだよ」

「...」

「そんなんじゃないよ。お礼参りとかリベンジとか、そんなじゃないんだ。そんなくだらないコウコウってやつに幻想もってた自分に、ケジメつけたかっただけ。だから、徹底的にやらないと気がすまなかったのかな」

「...」

「いいじゃんか、学校になんかしがみつかなかたって。学歴なんかなくてもさ、それなりに楽しくやれる方法なんかいくらでもあるじゃん」

「...」

「和也、痛いよ。そんなにきつく抱きしめないでよ...」

知世ははるかに和也より大人だった。彼女にそう言われるまで自分自身気づいていなかった。コウコウをやめてからも、彼はどこかでコウコウというものに縛られていたのだ。

和也を自由にしたのは知世だ。

やがて少しずつ、和也と知世の言葉に動かされて、行動を共にする仲間たちが増えていった。

カズヤの話を聞いて『自由』になれた仲間が何人もいる。

サッカー部でイジメにあって悩んでいたマサ。

ガッコウには居場所がなく、くすぶっていたタク。

シボウコウというわけのわからないものに縛られていたユカ。

トウコウキョヒのモンダイジだったヨシキ。

コウコウというものが必要な奴はコウコウにしがみつけばいい。

しかし、必要としない奴だっている。

そういう奴らには教えてあげなきゃいけない。

ガッコウになんてしがみつかなかなくても、生きていく方法があるんだってことを。

まあ、今日のメンバーじゃ、ガッコウをそれなりに楽しんでいるのは新人のハルユキとカノジョのアイコくらいのものだろうけど。

それはそれでオーケーなんだ。ガッコウを楽しんでいる奴からガッコウを奪う気もないし、コウコウに行ってるからってそいつをシカトするようなくだらない奴は俺のチームにはいないし。

最初は立ったまま愛しあった。

次はカズヤが上。

果てるときはカズヤが下。

そしてそこから裸のまま、抱き合っただけの時間を過ごす。

『狩り』の最初のころから続けられてきた、二人だけの儀式だ。

二人はクライマックスを迎えようとしていた。

カズヤがベンチに横になった。

汗がにじんだカズヤの裸体に、トモヨが重なった。

激しくキスと愛撫を繰り返しながら、カズヤはトモヨの中に入る。

カズヤを迎え入れたトモヨは、悦びの声をあげながら、腰をゆっくりと動かしはじめた。

その動きに同調するように、カズヤも腰を浮かせ、下半身を波うたせる。

お互いの動きがお互いを刺激し、お互いを興奮させる。

カズヤの動きが早く、激しくなる。

その動きにつられるように、トモヨの動きもダイナミックなものに変わる。

トモヨがびくん、と大きく一回、身体を震わせた。

ゼッチョーってやつかな。俺も、そろそろ...

トモヨ。

その直後、カズヤはトモヨの中にありったけの精子を注ぎ込んだ。

二人の動きとあえぎ声がぴたりと止まった。

近くの草むらで虫が鳴いている。

トモヨがカズヤにもたれかかるように抱きついた。

さっきの性交の余韻だろうか。トモヨの身体は小刻みに震えている。

カズヤはトモヨを抱きしめた。

「なあ、トモヨ...」

狩りとか卒業したらさあ、バスケとかサッカーとかしよっか...

今の仲間と。

なんか、ホンモノのカゾクみたいにさあ。

フツーに遊びたいよなあ。

カズヤがそう言おうとしたとき、奇妙な感覚が彼を包んだ。

トモヨの震えは、いつまでたっても止まらない。

「トモヨ？」

カズヤは彼女の上体を抱き起こした。

トモヨは目を見開いたまま、はあはあと浅い呼吸を繰り返している。

「おい、どうしたんだよ、トモヨ」

彼女の中に挿入したままのペニスが急激に萎縮していくのがわかった。

「カズヤ...アタシ、なんか、変...」

トモヨが小さな声で言った。

カズヤの腹のあたりを、液体のようなものが濡らしている。

尋常ではないその量から、それが精液や愛液の類ではないことは明らかだった。

月あかりの中、目をこらしてカズヤはトモヨの様子を見た。

トモヨの下腹部にホクロのような黒いシミが見える。

液体はそこからとろとろと流れ出ている。

ホクロの中心部に、金属片のような何かが見える。

何だよ、これは。

みるみるうちにその金属片は大きくなっていった。

やがてトモヨの腹から、血まみれの棒のようなものが突き出てきた。

ぐ・ぐ・ぐ

彼女の口からは声にならない音が漏れている。

「トモヨ」

カズヤは身体を起こし、今にも崩れそうなトモヨの身体をささえた。

彼女が小さく咳をした。同時にぐえと喉が鳴る音がして、大量の血を吐き出した。

赤い血がカズヤの腹を濡らした。

ぴくん、ぴくん、ぴくん。

彼女の身体が痙攣をはじめた。

カズヤは彼女の裸身をもう一度抱きしめた。

「え？」

抱きしめたとき、カズヤはトモヨの背中に何かがかくっついていることに気づいた。

「何だよ、これ」

トモヨの背中に、信じられないものが『生えて』いる。

旗竿。

ポール。

その先端には何故か黒い下着がくくりつけられている。

「カズヤ...」

トモヨの唇がそう動いた。

そして彼女の首が力なくうなだれた。

「トモヨっ」

彼女の背中に突きたてられたポールが、身体を突き抜けて腹から出ている。

カズヤは自分の目で見たものが信じられなかった。

ふいに月がかげった。

いや、違う。

誰かがカズヤの真横に立っている。

誰？

それでもカズヤは壊れていくトモヨから目を離すことができなかった。

トモヨの両肩から手を離すことができなかった。

『誰か』の手に握られた『何か』が耳元で『ち・ち・ち』と音をたてた。

スタンガンの音？

カズヤの思考はここで途切れた。

トモヨの身体がぐしゃりと地面に崩れる音だけが聞こえた。

下巻に続く